

菊池寛の「真珠夫人」の中に登場する新たな女性像について

陳 月 吾*・唐 麗 燕**

Analysis on new images of women in the lengthy novel Shinjiu Fujin (Pearl Lady)

Yue Wu Chen and Li Yan Tang

When Mr. Kan Kikuchi was 33 years old, he published his lengthy novel Shinjiu Fujin (Pearl Lady), which is certainly a very important mile stone in his novels writing career. At the time when Shinjiu Fujin was published, it was still generally considered that women remained weaker than men, although the Taisyuu democracy began to play an important role in people's life. However, Mr. Kan Kikuchi, a famous human right fighter, claimed the heroine Liulizi in his novel as a new woman who has her own dignity, independence and freedom. This article focused on analyzing the new images of Japanese women in Shinjiu Fujin.

始めに

菊池寛は33歳で最初の記念碑的な長篇小説「真珠夫人」(大正9年)を発表した。「真珠夫人」が発表された時代は、いわゆる大正デモクラシーの風が吹き始めていたが、女性はまだ弱いものという一般観念は牢固として抜けなかった。しかし、フェミニストである菊池寛は、当時男尊女卑社会の本質を鋭く見通す目を持ち、この長篇小説に自らの尊厳と独立と自由を主張する新たな女性像——瑠璃子を造型した。

小論は「真珠夫人」及びヒロイン瑠璃子の新しさについて、分析してみたいと思う。

一、「真珠夫人」の発表及びその反響

「真珠夫人」は、大正9年6月9日から12月22日まで、「大阪毎日新聞」と「東京日日新聞」に同時連載された長編小説である。菊池寛の書いた初めての通俗長編であるとともに、当時の日本の通俗小説に新風を吹き込んだ画期的な作品でもある。

真珠夫人とは、社交界で莊田瑠璃子に与えられた名である。瑠璃子は清貧の政治家唐沢男爵の娘だったが、園遊会で恋人の杉野直也と莊田勝平の成金趣味を攻撃していたところを、当の莊田に聞かれてしまった。自尊心を傷つけられた莊田の謀略により、父親は政治生命を絶たれる危機に陥った。父親の窮状を救うために、瑠璃子は自分の貞操を賭け、復讐を誓い、莊田のもとに嫁いたのである。

結婚した後の瑠璃子は、形だけの妻として、勝平の心を悩み狂わせ、愚弄するのであった。一方、勝平の前妻の子である優しい美奈子と白痴の勝彦は、二人とも瑠璃子を姉のよ

* 教養部 ** 中南大学

うに慕っている。ある嵐の夜、欲望を満たされない勝平は、瑠璃子に迫ろうとしたが、勝彦が飛び込んできて父を襲い、勝平は心臓麻痺の発作で急死してしまった。

瑠璃子の復讐はこうして終わったが、彼女は勝平の家を離れなかった。美奈子の世話を優しくしながら、財力を背景に、瑠璃子は慕いよる男性たちを思いのままに翻弄する。青木稔は彼女に惹かれる男性の一人であり、美奈子がひそかに慕っている男性でもある。それに気づいた瑠璃子は、稔の求婚をきっぱりと拒否した。稔に刺され、瀕死の床にいる瑠璃子は、一日も初恋の直也のことを忘れなかった、結局、彼女は直也の胸に抱かれて処女のまま死んでしまった。

作者の期待通りに、「真珠夫人」は、発表当時爆発的な人気を呼んだ。しかし、時が経ち、その欠点もいろいろな批評家、研究者から指摘され始める。

前田愛は、「大正後期通俗小説の展開」で次のように論じた。

荘田勝平、ひいては男性全般への復讐の動機が個人や家の次元を越えて社会悪への挑戦というかたちをとって語られているところに、大正版金色夜叉としての「真珠夫人」の新しさが肯定されるわけである。しかし、反面それは彼女の内面の声を伴うことなく、「家」の問題を巧妙に消去した幻想として語られた。観念的な生硬さの印象は否定できないのである。しかも、このような傾向性は物語の結末に近く「母」ないしは「処女」としての瑠璃子の役割が強調されるにいたって、希釈され、相殺されてしまう。菊池寛もまた家庭小説の根強い呪縛からまったく自由ではあり得なかったのであった。

また、川端康成も「真珠夫人など」で、次のような文を書いた。

瑠璃子は処女を守り通して、初恋の男を胸にひめ、その胸に抱かれて死んでゆく。そして仇敵であった夫の先妻の娘、可憐な美奈子とやさしく愛し合つて、美奈子の初恋をだいに思ふ。さういふところに菊池氏は読者の同情を求めた。瑠璃子は新しい女として不徹底であり矛盾もあるが、通俗作家菊池氏の道徳と節度も見られる。

金子勝昭は「歴史としての文藝春秋」で、次のように論評した。

瑠璃子は女性解放に目覚め、男女平等のために戦うヒロインである。この点では、明らかに「不如帰」(「国民新聞」1898年2月～1899年12月)より進歩している。

けれども、それならばなぜ瑠璃子は恋人をあきらめて成金と結婚したのだろうか。父親を救うためである。つまり、親の犠牲になったのである。また、義理の娘のために自分の恋を捨てて、それがみずからの死を招く原因となるという設定。そして、結局は処女を守り通した生涯。

要するに、義理のしがらみとか女の貞操という点では、旧来の道徳とそう距ってはいないのである。ただ、封建道徳に代わるものとして、人間のまごころとか主体的な決断という新しい衣装をかぶせているに過ぎない。

つまり、女性解放に目覚め、男女平等のための戦いや、荘田勝平、ひいては男性全般への復讐の動機、換言すれば、個人や家の次元を越えて「男性本位の道徳」に果敢に戦いを挑んだことなどからいえば、菊池寛の造型した瑠璃子の新しさは肯定されるべきである。しかし、父親を救うための結婚、仇敵の娘に優しくし、ひいては彼女のために自分の恋を捨てること、処女を守り通した生涯などの設定が、義理の柵や旧来の道徳からは離れていないため、新しい女性として瑠璃子の造型の不徹底と矛盾とは否定できない。これが「真珠夫人」に対する一般的な評価である。つまり、悪魔に近い復讐の女神、娼婦型の未亡人という設定に新しさが認められ、人間の善性に起因する父親を救う娘、継娘を庇護する義母、初恋に対する操守などの設定に新しさの不徹底、即ち旧来の古さが認められるというのである。しかし、そういう評価の基準は果たして正しいのであろうか。次は、それにつ

いて考えてみようと思う。

二、新しい女性—瑠璃子

「真珠夫人」以前に、新しい女を描いた小説がなかったわけではない。

夏目漱石は早くも1907年「虞美人草」で新しい女性—藤尾を描いた。良家の娘は全く家庭内に封鎖され、見合いによって婚姻が決定されるのが当時の慣行であり、常識でもあった。藤尾のように自分で夫を選ぼうとした意志は、極めて例外、かつ進歩的な考えであった。しかし、それゆえ、彼女は登場人物のほとんど全員から叛かれ、ひいては、宗近に満座の前で侮辱され、耐えかね、自ら死を選ぶのである。藤尾を殺したのは、直接には自由的恋愛を否定する時代の封建性だが、彼女の内部に潜んでいる自分自身の弱さも強く作用した。何より強く作用したのは、作者の女性観でもあった。藤尾がなぜ悪いかといえ、ば、「自我」が強く「去私」することができないからである。作者はあくまでも藤尾という女性を否定していた。すなわち、夏目漱石は新しい女性を創作しながら、身のうちに強く残った封建性により、自ら創造したヒロインを否定したのである。

有島武郎は1919年に完成した「或る女」で早月葉子という新しい女性を描き、高く評価された。葉子の学んだ明治女学校は、古い封建道徳に反抗する自由と進取の気象に満ちていた学校である。葉子自身もあらゆる既成の道徳や社会の束縛を蹴飛ばし、勇敢に自分を生かそうとする女性である。しかし、彼女はただ自分の感情の動くままにふるまい、個人的な享楽生活に熱中した。だから、彼女の自由への追求、男性への反抗は倉地の前で完全な敗北に終わったのである。葉子の性を武器とした個人主義的、自己のための反抗は、結局失敗し、妥協的態度に終わるよりほかないのである。心身が錯乱状態に陥った葉子には強い悔恨があった。しかし、どこが間違っていたのか、葉子の後悔とは何か、作者は何も語っていない。おそらく有島武郎は自分の創造した新しい女性像に対して疑惑を持っていたのだろう。

では、菊池寛に造型された「真珠夫人」の瑠璃子とはどういう女性か。もう一度小説の粗筋に戻ってみよう。

物語の起点に登場する瑠璃子は、青年貴族直也に思慕を寄せる清純な美少女に過ぎない。莊田の姦計で父親の生命が危急に陥った時、娘として出来るのは莊田の条件をのむことだけであった。これが、瑠璃子が復讐を誓う挑戦者へ急転するきっかけである。しかし、注意したいのは、父親を救うことが彼女が復讐者に急転した根本的な動機ではない、という点である。

莊田家に嫁ぐ決心をした彼女は父にこう言った。

現在の社会組織では、人格がどんなに下劣でも金さへあれば帝王のやうに強いのです。……妾が戦はなければならぬ相手は莊田勝平といふ個人ではありません。莊田といふ人間の姿で現はれた現代の社会組織の悪です。金の力で、どんなことでも出来るやうな不正な不当な社会全体です。金さへあれば、何でも出来るやうな、その思想です。観念です。

要するに瑠璃子の挑戦しようとする対象は、金権万能思想であり、莊田という人間の姿で現われた社会悪なのである。

瑠璃子は金力との戦いでは見事に勝利した。今まで「金さへあればどんな事も出来る」という金力万能を確信していた莊田は、金で買えない物が、世の中に厳として存在してい

ることを潔く認め、「金では人の心の愛情の断片をさへ、買ふことができない」と告白した。彼は自分の非を悟り、瑠璃子の前に平伏し、彼女の愛を哀願した。負けた荘田は負けながら人間として救われた。荘田が最後に瑠璃子を感動させたのは、彼の富の力ではなく、彼の人間的な善良さや弱さである。

金力への挑戦で見事に征服者になった瑠璃子だが、その戦いはこれで終わったのではない。残された敵は「社会組織の悪」であった。彼女は荘田家を離れず、美貌、財力を背景にし、初恋を踏みにじられた恨みを持ちながら、「男性本位道徳」に起因する社会悪に第二次の挑戦を始めた。青木淳はその第二次挑戦の最初の犠牲者である。表面的には自動車事故で死んだ彼は、実は精神的に瑠璃子の翻弄により殺されたのである。事情を知った信一郎は義憤を感じ、瑠璃子の罪深さを責めるが、瑠璃子は次のように反論した。

女性が男性を弄ぶと、貴方方男性はすぐ妖婦だとか毒婦だとか、あらん限りの悪名を浴びせかける。貴方などは、眼の色を変えてまで、叱責なさろうとする。が、御覧なさい！世間の男性がどんなに女性を弄んでゐるかを、女性は男性を弄ぶに致しましたところで、それは、男性の浮動し易い心を弄ぶのにすぎないぢやありませんか。男性が女性を弄ぶ場合は、心も肉体も、名誉も節操も、蹂躪し尽くすぢやありませんか。眼にこそ見えませんが、この世間には、男性に弄ばれた女性の生きた惨たらしい死骸が、いくつ転がつてゐるかも分かりません。貴方の目の前にゐる女性なども、案外にさうした生きた死骸の一つだか分かりませんよ。

男性は女性を弄んでよいもの、女性は男性を弄んでは悪いもの、そんな間違つた男性本位の道徳に、妾は一身を賭しても反抗したいと思つてゐますの。今の世の中では、国家までが、国家の法律までが、社会のいろいろな組織までが、さうした間違つた考へ方を、助けてゐるのでございますもの。

烈しい瑠璃子の反撃は、信一郎の心をかなり震撼させた。彼の瑠璃子に対する考え方は次のように変化する。

彼の夫人にたいする憎悪は三度四度目に、又ある尊敬に変つてゐた。旧道徳の殻を踏み躪つてゐる夫人を、古い道徳の立場から、非難してゐた自分が、かなり馬鹿らしいことに気が付いた。夫人の男性に対する態度は、彼女の淫蕩な動機からでもなく、彼女の妖婦的な性格からでもなく、もつと根本的な主義から思想から萌してゐるのだと思つた。

そのもつと根本的な主義と思想とは、すなわち男女平等主義である。男性がしていいことなら女性もしていいはずだ、男性が平気で女性を弄ぶなら、女性も平気で男性を弄んでいけないはずはない、という主張である。瑠璃子は自分の主張のもとに女郎蜘蛛のように、慕い寄る男性たちを思いのままに悩ませ、怒らせ、焦らせ、争わせ、男性のみに許されていた行為を敢然と実践して見せたのである。

しかし、彼女のこの戦いは、計画どおりにうまくいかなかった。彼女の誘惑の次の目標となった青木稔が、実は娘の美奈子がひそかに慕っていた男性だったからである。二度とは得がたい、宝玉のような初恋が踏み潰された経験のあつた瑠璃子は、自分の所為により、一番愛している美奈子の清純な処女の心を傷つけようとは、夢にも思わなかった。自分の戦いにより、男性だけではなく、同性の被害者も出てきたことに気付いた彼女は、青木稔の気持ちを美奈子に向けようとし、潔く青木稔の求婚を断つた。それが死を招く原因となった。

美奈子は、亡くなった瑠璃子の肌襦袢に、密かに縫い込まれた初恋の直也の写真をみつける。「黄金の力のために偽の結婚をしたときも、美しき妖婦として、群がる男性を翻弄してゐたときにも、彼女の心の底深く、初恋の男性に対する美しき操は、汚れなき真珠の如く燦然として輝いてゐたのであつた。」——この破局の後に添えられた言葉は、美奈子の解明であり、作者自身の種明かしでもあつた。

この「汚れなき真珠」には、もちろん瑠璃子の処女の体だけではなく、彼女の人間的な善心が示されている。悪魔であつた莊田さえ、広い人間性により、最後に寛大な善良な人間に蘇ることができた。清純な美少女であつた瑠璃子に人間的な貴い善性がもちろんないはずはない。

瑠璃子は「復讐の女神の如く烈しき性格」を持っている女性であり、人間としての、また女性としての道徳と善良さも持っている女性でもあつた。父親を救うために結婚し、人間的に蘇った莊田に感動し、継娘を優しく愛し、直也のために操を守り、一方正義のために社会組織の悪に挑戦した。いずれの所為も、彼女にある「人間性の道徳」から解釈できる。瑠璃子に現われた人間的な善性は、少しも彼女の新しい女性としての造型と矛盾しないのである。反対に、人間の善性を持っていない女性は、如何に思想が時代を越えても、如何に才気、勇気に溢れていても、本当に新しい女性とはいえないだろう。この「汚れなき真珠」こそ、菊池寛が「真珠夫人」を通して、高らかに謳いあげたかった主題なのである。

また、処女のまま生涯を守り通す、という設定は、古い貞操観念の現われとして取るより、むしろ初恋の人に対する心と肉体の操をまもりながら、初恋を踏みこまれた恨みを多くの男性に報いるという、恋愛至上主義の変形として取ったほうがいい、と私は思うのである。

仇敵の遺言どおり、継娘に全身の愛情を注ぎ、娘の恋の成就を願う母親の役割に目覚め、処女のまま生涯を守り通し、という設定は、不徹底だと世評されたが、その設定こそが瑠璃子という人物造型の最も成功したところではないだろうか。

ふさわしい才知と勇気を持ち、自分の意図を貫くために、男性本位の社会に反抗しようとした点では、「虞美人草」の藤尾も「或る女」の葉子も新しい女性だといえるだろう。しかし、藤尾と葉子のいわゆる反抗は、所詮世間から踏みつけられてきた、女性の体の中から湧き上がってきた本能的な反発である。一体自分が何をしているのか、何のためにこうしなければならないのか、彼女ら自身は分からないのである。彼女らの反抗はただ無意識、無方向、無目的な反抗であつた。反対に瑠璃子の挑戦は、最初から明確な目的を持つ復讐であつた。彼女の復讐する動機は、莊田家に嫁ぐ決心をした時、すでに父に告白された。また、そういう動機をもっとはっきり読者に示すため、菊池寛はストーリーの開始早々、不意の事件で莊田を死なせた。瑠璃子の復讐が、単に、父親を救うための個人に対する復讐ではなく、個人や家の次元を越えた社会悪への理性的な挑戦であることが莊田の死より明らかにされた。女性解放に目覚め、自覚的に男女平等のために戦う、という点では、瑠璃子は遥かに藤尾や葉子より進歩しているのである。

また、新しい女性を描く作品であっても、夏目漱石の藤尾に対する否定、有島武郎の葉子に対する疑惑と比べ、菊池寛の瑠璃子に対する好意と賞揚は著しい。瑠璃子は決して惨めな敗北者ではなく、彼女はあくまでも激しい憎悪と強い闘志に燃え、自分の美貌と才気への確信に溢れた挑戦者として描かれたのである。彼女の死の場面には何の後悔も描かれなかった。

終わりに

瑠璃子は大正の女性だが、彼女の人間像から時代的な古臭さはほとんど感じられない。現代小説の主人公にしても少しも不思議でないくらい、清新的な生き生きした女性である。この新しさは、彼女の古いもの、既成の社会悪の根源—「金の力」と「男子本位の道徳」に挑戦する姿から、彼女の恋愛至上主義から、彼女の人間性から来るのである。しかし、残念ながら瑠璃子の戦う手段は、自然人としての女性の属性に局限された。周知のように、昔と比べ、現代女性の社会地位は著しく高まった。それは、決して瑠璃子のように女性自身の美貌と巨富で男性を征服した結果ではない。それは社会各分野での、女医者、女教師、女作家、女記者、女優、女歌手、女選手、女大臣など、社会人として女性が活躍の場を広げたからである。言い換えれば、自由恋愛、自主婚姻は、女性の社会的地位を高めた原因ではなく、女性の社会的地位向上がもたらした結果である。恐らく、菊池寛自身も後にはそういうことを意識したはずだ。彼の後の作品の多くには、女性の職業の必要性、女性自身の独立と尊厳の重要性を強調している。

参考文献

- 前田愛 大正後期通俗小説の展開 文学 昭和59.6
佐藤みどり 人間・菊池寛 松明社 昭和64.1
金子勝昭 菊池寛の時代 新潮社 昭和54.1
永井龍男 菊池寛 時事通信社 昭和36.3
川端康成 菊池寛論 実業之日本社 昭和12.3

(平成17年12月2日受理)